

一人一人が自分で人生を選択し、いきいきと 生きることができる社会をめざして

男女格差や性の多様性が、ニュースなどで取り上げられる機会が増えてきました。しかし、私たちはまだまだジェンダー(社会的性差)にとらわれた生活をしてはいないでしょうか。三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」の所長である荻原くるみさんにお話を聞きました。



フレンテみえ所長 荻原くるみさん

男女格差に関わる最近の社会の動きをどう思われますか？

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会での女性蔑視発言もあり、今あらためて日本における男女格差に注目が集まっています。各国の男女格差を示す「ジェンダーギャップ指数2021」で、日本は156カ国中120位でした。その一方で、女性や弱い立場の人からの声は、少しずつ広がりを見せているように感じます。「#MeToo運動」や「医科大入試の女性差別」などをきっかけに、性暴力やセクハラ、男女格差や女性差別に対する声が新聞や

ニュースでも多く取り上げられるようになりました。

私自身は、保育園の待機児童問題が国会で取り上げられたことが強く印象に残っています。一人の女性のやり場のない思いがSNSに投稿されたことをきっかけに、待機児童問題への社会全体の関心が一気に高まり、待機児童ゼロに向けての取り組みが進みました。昔ならかき消されていたかもしれない女性の声が、今は政治や教育、社会を変えていくのだと実感しました。

それでも、男女格差はなかなか埋まっていけない。なぜでしょうか？

日本の男女格差の大きな課題は、「政治家や企業などのリーダーに女性が少ないこと」といわれています。まずは一人一人の意識を変えていくことが必要だと思っています。

私は、比較的男女の格差が少ない学校現場で長年仕事をし、管理職にもなりました。そうした職場であっても、かつては「体育担当は男の先生、給食担当は女の先生」であることが多かったです。また、男性の育児休業について、私は「特別に熱心な人が取るもの」と思っていました。しかし、「フレンテみえ」でたくさんの人に出会い、学んでいく中で、私自身も「女は、男は、こうあるべき」という「無意識の偏見」を持たされていたことに、あらためて気付かされました。男性の育児休業制度が今よりもっと普及していくことで、私たち一人一人が今まで知らず知らずのうちに持たされてきた性別役割分担の意識から解放され、それぞれに合っ

た働き方・暮らし方を選択できるように、社会全体がより力を発揮できるようになっていくのだと分かってきました。

生きにくくさせられているのは女性だけではありません。男性の自殺者が多い理由には「男は弱音を吐くな」という価値観が社会にあることも指摘されています。社会学者の上野千鶴子さんの言葉に「フェミニズム(女性解放思想)は、決して女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。弱者が弱者のまま尊重されることを求める思想です」という言葉があります。強かろうが弱かろうが、女性であろうが男性であろうが、一人一人がありのままの自分で生きられる社会を、私はつくっていきたいです。



フレンテみえマスコットキャラクター
フレンディ

今後の活動について聞かせてください

「私たち一人一人の暮らし方、意識が変われば社会も変わる」、そう思って活動を続けています。これからの社会をつくっていく若い世代のためにも、自分の中にある「無意識の偏見」を見つめ、自分を変えていけるような啓発の機会を広げていきたいです。

